

<総評>

全体的にこの「口語詩句」という詩形がかなり落ち着いてきたような感じがします。見えな  
いものを探りながら、結論じみたものは読者の自由にまかせ、その先に何をみるか。感性だ  
けではない思想の探求を短詩形の中でどう形作っていくか。何か、今月はちょっと安心して  
読めるような気がしました。

首すじも乳ぼうもさらしたよ

けど わたしのなかの紫の鳥居

作者 藤ほとる 神奈川県

——身体の中でももっとも敏感な部分をさらけだしても、神聖とされるものが立ちほだか  
るのはなぜか。それは果たして必要なものか乗り越えるべきものか。

いかにもなバイクうるさく

その人に存在している苦痛を笑う

作者 松下 誠一 東京都

——「苦痛」ゆえにバイクをことさら大音量でふかす。単純で明快な苦痛を作者は同情と距  
離をもって見ている。

伸びるほど

揺れやすくなる昇降機

僕はあなたと老いていきたい

作者 松下 誠一 東京都

——人生は時間と共に達観するのではなくますます不確かになっていくもの。だからあな  
たと老いていきたいという。若い作者の透視力。

知床の ヒグマは魚

食べたかな

今夜のぶりを

切って雨聴く

作者 ゆうか 東京都

——同じ生きるものを食べる仲間であるヒグマと自分。優しさに夜の雨が添う。

飛行機が空を飛ぶこと

まだ少し信じられない

兄の結婚

作者 青野陽 熊本県

——あの兄が「結婚」する。鉄の塊が空を飛ぶ。当たり前とされていることが改めて言葉にすると違って見える。

立ち止まる瞬間キリトリ線がある

作者 まちりこ 埼玉県

——キリトリ線があるから立ち止まったのか。いや多分立ち止まったからキリトリ線ができたのだろう。

決断をしない足の形した

舟がかたんと沈むまでには

作者 藤ほたる 神奈川県

——「足形」も「舟」も人の生き死にのシンボル。ましてそれが「足の形した舟」とあってはごまかしは効かない。

真四角で

ル・コルビュジエの家みたい

母がすらりと切った豆腐は

作者 折田 日々希 神奈川県

——生活の中で繰り返された動作は寸分の狂いもなく、柔らかな豆腐も堅固な建築も同じ人間の営みの美しさを見せる。

青空の罫線として電線を、

僕らが利き手で掴む焦燥

作者 松下 誠一 東京都

——「利き手」は知性に支配された道具。「電線」は道具ではあるが、「青空の罫線」という時代の書割でもある。書割は変わるだろう。知性よ時代に振り回されるな。

蟹食えばわさわさ動く表情筋

作者 さいう 愛知県

——蟹食う人は手も意識も顔も総動員する。だからうるさい客を黙らせるためには蟹を喰わせろという。

しりとりをすれば

あなたが

どんな日を過ごしてきたか

わかる気がして

作者 まちりこ 埼玉県

——肩を揉めば筋肉が、しりとりをすれば言葉が今日のしわざを語ってくれる。

恋バナに飢えてる母の

猛攻を避けつつ

髪を乾かしている

作者 さいう 愛知県

——同じ女としての母と娘の姿がくっきりと見える。娘にやや分在りか。

一筋の涙も影には映らない

幹登る水が見えないように

作者 小林奔 神奈川県

——投影というように影はざっくりとした全体像。木のなかの維管束を上る水が見えないように細部は見えない。だから良いのでは。